



# 中里洋平さん (木工・漆)

何十回もの工程を経て、作り出される漆の作品。そこには、表面には見えない細かな心配りがたくさん隠れていました。



布を貼った部分との段差を無くす為、漆を塗る。

工業デザインを海外の学校で学び、卒業してからは一般企業へ就職。ある時、仕事で行ったギフトショーで浄法寺(岩手県)の漆と出会い、その格好良さに一目惚れ。それから、モノづくりの世界へと大きく転進した。昔から興味があった木工と、漆塗りを少しずつ独学で学び作り作りがスタート。手で彫って作られる為、お椀などの表面には手彫りの跡が残り、良い風合いを残したまま形が出来ていく。そして、漆塗りの工程へと進んでいく。下地…乾燥…磨き…塗り…何十回もの工程を経てやっとひとつの作品が仕上がる。

「別に全ての工程をしななければいけないと言う決まりは無いんです。木にそのまま漆を塗るだけでも漆塗りなんです。」そんな事を笑みを浮かべながら話してくれた。その方が時間もかからずコストも抑えられ、お客様へ安く提供できるだろう。しかし、使う人を一番に考え、一生使って貰



一定の湿度と温度を保ちながら木の箆筥で乾燥させる。

使っていて、脆くなりやすい部分には布を張り強度をもたせる。湿度と温度を保ちしっかり乾燥させる。極力ほこりがたかないように、慎重に仕上げの国内産漆が塗られる。それぞれ意味を持った工程が十数回続く。

「まだ漆を初めて三年です。自分はまだ全然なんです。」確かに漆塗りは奥深く、何年もの修行を必要とするものなのかもしれない。しかし、一目惚れから始まり独学で学び作り出される作品からは、一般的によく目にする綺麗に仕上げられた漆とはまた違い、どこか温かい印象を受ける。それは、最初から最後まで自らい、ひとつひとつの作業に中里さんの細かな心配りが施されているからだろう。一生使い続けたいと思えるものを、これからも多くの人へ届けて行って貰いたい。



人毛で作られた道具。カットしながら、ずっと使い込む。

えるものを届けたいと思う中里さんにとっては、どの工程も大切なもの。省くことはしない。

